2002年3月31日発行（年二回刊）

仙台文学館ニュース

創刊号

Sendai Literature Museum News

文化とは何か
―館報発刊にあたって―

日ごろから仙台文学館を、愛情をこめて大切にご利用くださいまして、館員一同、深く感謝しております。

さて、このたび、わたくしどもは、いま、まさに、お手にしていての館報を発行することになりました。開館からこれまでを揺籃期とすれば、この館報の発行をもって、仙台文学館は、ついに幼少年期に入ったといっていいでしょう。質の良い記事を満載することで、文学館そのものも着実に成長させて、さらに、文化の滋味にあふれる文学館にせずにはおくものかと、館員一同、いま、その覚悟を新たにしているところです。

たったいま、「文化の滋味」と言いましたが、ご存じのように、「文化」は、まだまだ歴史の浅い言葉です。年号に「文化文政」がありますが、この場合の「文化」は、〈文徳によって教え導く〉、つまり〈学問によって人民を教化する〉という意味で、いまの使われ方とはまったくちがいます。

欧米での歴史も似たようなものので、いまのような意味で使われたのは一八六〇（万延元）年からでした。この年、スイスの文化史家のブルックハルトが『イタリア・ルネッサンスの文化』という書物を発行して世界中で大いに読まれ、そのときから、〈一つの時代、あるいは一つの国民の精神活動と、その活動から発生するすべてのもの〉という意味が定まったのでした。

ということは、この定義は、じつは文化の中味を、わたしたちがこれから作って行かねばならないことを示唆しております。ブルックハルトの定義をしっかり脱み据えると、文化というものが、〈わたしたちの日常生活のすべて〉という方向を指し示していることもわかってきます。たとえば、毎日の食事の内容とその食べ方、酒の呑み方、公共乗物の中での席の取り方、恋の仕方、結婚式のやり方、夫婦のあり方またその考え方……わたしたちの毎日の一挙手一投足が集まって束ねられたもの、それが文化の意味内容なのです。

もちろん、この「日常生活の束」は、たとえば、テレビだけから「教養」をとってはいやしないかどうか、スポーツ施設を必要としているかどうか、文学館に行く習慣があるかどうか、劇場や美術館や博物館や音楽堂に行くのが好きかどうか……などで、その質が低くも高くもなります。

テレビのワイドショーに笑ったり怒ったりしながらも、ベガルタ仙台の応援に出かけて行って声を嗄らし、次の夜は劇場で人間とはなにかを考え、その翌日は仙台文学館で静かにモノゴトの本質に思いを馳せる……そうやって日常生活の束の質を生き生きとさせ、そして同時にその質を高める。それがたぶんこれからの日常生活の基本になることでしょう。そのときにこの仙台文学館が、みなさまのお役に立てるよう、館員一同、これからも全存在をかけて努力をつづけます。どうぞ、仙台文学館を、みなさまの日常生活に欠かせないものとして十分にお使いくださいますよう、心からお願いいたします。

仙台文学館
館長　井上ひさし

ことばとその周辺――第一回

仙台周辺で広く文学にかかわる活動に取り組んでいるグループをご紹介するコーナーです。

読書交流誌『季刊　本も読みます』

「読書交流誌」を続けて七年間、二十九号。

「専門家の『書評』もよいが、普通の人が書いた普通の感想文も面白い。書き手と読み手が同じレベルで交流できる『読書周辺』誌ができれば」。創刊メンバーがたどり着いたのは、本がテーマの投稿を編む「読書交流誌」というスタイルだった。

きっかけは若林市民センターの主催講座。仙台在住の作家佐伯一麦さんを講師に、参加者が自らの読書体験を語りあった。

『季刊　本も読みます』

講座終了後、「このまま解散するのは惜しい」と感じた有志が集まって、講座のタイトルそのままに『本も読みます』を創刊した。九五年四月のことである。

創刊号の原稿は講座参加者に投稿を呼びかけた。以来七年間、季刊のペースを守り続けている。用紙の一メ分に当たる五百部が発行部数だ。

（左から）大原ゆかりさん、鈴木一美さん、佐々木悦子さん

仙台市市民活動サポートセンターが拠点。各自が原稿を持ち寄る。編集会議で掲載順や次の特集を相談する。都合のつく者が印刷作業を担う。これが活動の一巡り。「しばらくご無沙汰しても、大きな顔で出席できる」ほど、関係はゆるやかで、暖かい。「そういえば、会則もあったはずよね」。

六百字を目安に原稿を毎号募集している。読者（投稿者）からの原稿を優先して掲載するので、時にはメンバーの原稿がボツになることもある。「内と外との垣根が低いのかも」。

編集長の佐々木久善さんによれば、「本も読みます」の「も」には、本だけではなく映画や音楽など様々なジャンルを取り上げようという気持ちも込められている。「交流の窓」は開かれているのだ。

「『本も読みます』で紹介された本を図書館に探しに行く人も、ときどきいるらしいんです」と発行人の岡本順さん。「だから、開いた窓を残していきたい。目標？　これからも存在していくこと、です」

和やかな編集会議。左から編集長の佐々木久善さん、発行人の岡本順さん

●『季刊　本も読みます』は郵送誌です。購読を希望する方は、購読料として八〇円切手を一年分（四枚）、左記に送付してください。

●問い合わせ先
〒九八一―三二一四
仙台市泉区館六―一〇―九
岡本方『季刊　本も読みます』

文学館のイベントから

EVENT REPORT

井上ひさし 戯曲講座

二月十六、十七日

昨年十二月にはイプセンの『人形の家』、今年の二月にはチェーホフの『三人姉妹』をテキストに、井上ひさし館長が戯曲講座を開きました。一見難しく感じられる戯曲も、館長のわかりやすい解説つきで一緒に読んでいくと、その面白さが理解でき、さらには演劇にも興味が持てる、充実した講座でした。好評につき、今後も継続していく予定です。

講演会「日本文学盛衰史」

三月二日

講師：高橋源一郎氏（作家）

『さようなら、ギャングたち』（一九八一年）でデビュー以来、果敢に意欲作を発表してきた高橋源一郎氏が、近作『日本文学盛衰史』を中心に、日本文学の現在・未来について、熱く語ってくれました。

※詳細は四月刊行予定のブックレットをご覧ください。

第二回 詩のボクシング宮城大会

三月三日

自作の詩を朗読し、どれだけ聴衆を引きつけたかを競う「声のことばの闘い」で、今年二回目の開催。二月の予選会には、四十九名もの出場者があり、審査の結果、十六名が本大会へ臨みました。三月三日に開催した本大会は、講習室にリングを模した舞台を特設し、熱い戦いが繰り広げられました。

優勝は仙台市青葉区の大里凛々子さん。五月二十六日に東京で開かれる全国大会に、宮城県代表として出場します。

今後の予定

特別展「飯野和好村展～言葉につながるふるさと」

四月二十日（土）～六月九日（日）

仙台で『若菜集』を生みだした藤村の生涯をたどるとともに、『破戒』『夜明け前』をはじめとする数々の作品の自筆資料や初版本などを展示します。

こども文学館「えほんのひろば」

七月二十日（土）～八月二十五日（日）

今年は飯野和好さんの原画展を行います。七月二十七日（土）には飯野さんの講演会があります。

表紙のことば

針穴写真はパンフォーカス
どこにでもピントが合っている
だからどこにもピントは合っていない
凝視しなければ影に気付かず
見つめ過ぎては光を見失う
人の眼の不思議にも似て

針穴写真撮影：黒田　カツオ
本文挿画：古山　拓

仙台文学館
Sendai Literature Museum
仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020
FAX 022-271-3044

シリーズ 私の一冊

第一回

シモーヌ・ヴェイユ著

『労働と人生についての省察』

佐伯一麦

私は、建物の断熱材や防音材として利用されているアスベストを大量に吸うと、太さが髪の毛の五千分の一と言われるほど目に見えず細い繊維が肺に突き刺さるという、いわゆるアスベスト禍のために身体をこわして、東京での電気工稼業が続けられなくなり、二十八の歳に、わずかに習得した電気技術だけを頼りに茨城県の西部の町へと流出して、配電盤を制作する工場で働き始めた。

基本給だけではとても妻子のある生活を成り立たせることはできず、早朝から深夜に及ぶ残業が月百五十時間を超えることもある日々の中では、物が考えられなくなり、一年半あまりの間、小説のたぐいはもとよりエッセイさえもまるで書けなかった。

それは、まさに、『労働と人生についての省察』に所収されている「ある女生徒への手紙」で、シモーヌ・ヴェイユが、「ここでは、むしろ、考えないために給料が支払われているのです」と述べているがごとき労働だった。

だが、まとまった思考はできなかったが、断片だけのメモを取ることはできそうだった。例えば、

「高圧盤のトランスがうなる音。頭のなかの脆い部分を絶えず刺激し続ける音」

「触れ合えば、ショートして大事故を起こしかねない銅帯が近接している。無気味に銀色に光る」

「盤外配線は、トポロジーだ。壁面にフリーハンドで画を描いているようだ」

「釘は鉄塔であり、電柱だ。自分が電気工をしていたとき、無意識のうちに都市の中に張り巡らしていた電線のかたちと同じものがここにもある」

「電気工だった自分たちがやってきたことは、この世界の中に、巨大な一筆書きを描くことだった。その描線は、四方八方にさまざまな図形を描いては、交差し、また離れては近付き、というようにいつまでもうごき続けて変化する不可思議な模様のようだ」

などなど……。

そんなメモを、私は、少年の頃に新聞配達をしていた頃からの習慣で、まだ暗い夜の退け際に起き出しては出勤の時間まで書き綴った。その一日の始まりの時間をひそかに私は、「ホーリー・タイム」(聖なる時)と呼んで、毎朝生まれ変わったような清新な気持ちで机に向かうことを心がけた。そうしては、しばしば、高校生の頃に読んで放りっぱなしにしていた本書の、特に「工場日記」の箇所をひもといた。

実は、初読のとき、私は、ソルボンヌ大学を出て哲学教師をしていた彼女の工場勤めの動機に、ある戸惑いを感じないわけにはいかなかった。それから、「神」の概念が唐突すぎてわかりにくかった。その点についての感想は変わらなかったが、彼女のプレス工場での体験の細部が、当時の私に、強い説得力を持って訴えかけてきたのだった。

「五時四五分、機械を止めたとき、心は真暗で、希望もなく、そのうえ、ぐたぐたに疲れて精も根もつきはてた状態だった。しかし、たまたま歌の好きなかまど係の少年にぶつかり、少年がにっこり笑い顔を見せてくれたり(略)、着がえ部屋で、いつもよりももっと陽気な冗談が交わされるのを聞いたり、もうそれだけでわたしにはよかった、こういうほんのちょっとしたあたたかい友情があれば、わたしの心はよろこびに溢れ、しばらくの間は疲れも感じずにすむのだ。けれど、家に帰ると、また頭痛……」

彼女もまた、断片的にしか語れない。そして、最後には、暇もなく製品づくりに専念させられるという人間の根元的な不幸、悲惨な状態を、素直に受け入れるにいたるのである。

労働の悲惨さというものは確かにあるが、その内側では、そのこと自体をも肯定している精神状態が確と存在しているということ。労働する人間に不幸をもたらす原因を取り除くのは、労働に美しさを取り返させること。元来病弱だった彼女が、命懸けでつかん

労働と人生についての省察
シモーヌ・ヴェイユ著
黒木義典・田辺保訳
勁草書房刊

だ労働の観察の結果を私もまた手放すことはできなかった。

労働と人生について、際立った考察を行なったもう一人の思想家として、港で沖仲仕をしながら書き続けたアメリカのエリック・ホッファを忘れるわけにはいかない。

「機械が生き物同様、気まぐれ、気儘になりうることを知っている。フォーク・リフトやウインチを正確さと手練をもって思いどおり動かせる能力がいかに特殊な高揚した気分を生じさせるか、またすぐれたリフトやウインチの操作者が一般にいかに陽気で、遊んでいるような働きかたをするか、を見ることができる」(柄谷行人訳)

作家になる以前の私を支え、後に『ショート・サーキット』『ア・ルース・ボーイ』『渡良瀬』などの作品に結びついた労働体験は、シモーヌ・ヴェイユの悲観とホッファの楽観とのあいだを振れ続けていたようにいまでは思われる。

佐伯一麦(作家)1959年、仙台市生まれ。91年『ア・ルース・ボーイ』で三島由紀夫賞、96年『遠き山に日は落ちて』で木山捷平文学賞受賞。現在、『群像』に『ノルゲ』を連載中。近刊に『読むクラシック』(集英社新書)。

仙台文学館の展示品から

東京
新潮社出版

「夜明け前」(昭和7年1月 新潮社刊)　扉に記された「藤」のサイン

藤村署名入りの『夜明け前』

ひかえめに「藤」と署名された島崎藤村の『夜明け前』。これは、藤村研究者の故早坂禮吾氏から寄贈された六百十七点におよぶ藤村関係資料の中の一つである。

藤村は明治二十九年に東北学院の教師として赴任するため、はじめて仙台を訪れた。実家の没落、失恋などの暗澹たる心情を抱え、この地を踏んだ藤村であったが、仙台の自然とそこで得た友情によって次第に心を癒され、『若菜集』執筆へと向かっていく。

それから四十年の歳月を経た昭和十二年六月、「草枕」の一節が刻まれた詩碑を見るため、藤村は再び仙台を訪れた。学生だった早坂氏は東北帝大主催の座談会に参加し、『夜明け前』の扉に「藤」と署名をもらうのである。そしてその感激を同書の表紙裏に「この一字をながめて居ると、本当に藤村らしい藤村を見る様な気がして、云ひ知れぬよろこびが、次第々々に私の胸に沁みとほつてゆくのをおぼえる」と綴った。この邂逅が早坂氏を藤村研究の道へと誘なうこととなった。

仙台再訪の二月ほど前に「新生事件」の古傷を露わにされ、世間から非難の目を向けられていた藤村には、仙台の美しい印象が慰めになったのかもしれない。藤村のそれまでの生涯は、作家として成功するも、幼いわが子や妻の死など、家族や知人を犠牲にし、葛藤を繰り返す苦悩にみちたものであったのだ。思い出の地・仙台を訪れたその日、生涯を振返り「結局四十年のあゆんできた道を考えてみると、みんな悲しみの涙でございます。」と学生たちの前で大粒の涙を流したという。若き藤村を癒し、憩わせた仙台の風土は、老いた藤村を再びやわらかく包んだのであった。(庄司潤子)

島崎藤村(1872年〜1943年)

石川善助の四冊のノート

暮鳥・犀星を愛読

当館に所蔵されている資料の中に、詩人・石川善助の四冊のノートがある。

石川善助は、一九〇一(明治三十四)年五月、仙台市国分町五丁目現：仙台市青葉区国分町)に生まれた。現在の仙台市立商業高校に入学してから詩に目覚め、山村暮鳥・室生犀星などを愛読し、校友会誌に詩を発表しはじめる。卒業後、藤崎呉服店(現：藤崎)計算課に勤めながら詩作を続けた。

一九二二(大正十一)年に詩人の郡山弘史らと創刊した『感触』で、本格的に詩人としての出発をとげ、その後も次々に詩誌を発行、やがて県内の詩壇をリードする存在となった。

石川善助

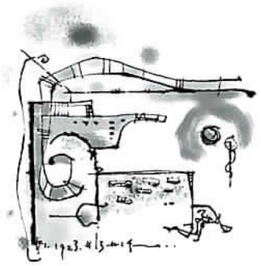
しかし、詩人として身を立てたいという強い願いから、一九二八(昭和三)年に職を辞し上京。幼少期から足が不自由であった善助だが(その原因は事故とも病とも伝えられる)、そのような体を抱えて都会で詩作だけに身を賭して生きることが、いかに困難であったかは、多くの先達が記すところである。

だが、この上京から、不遇の死を迎えるまでの、足掛け四年の日々で、高村光太郎や福士幸次郎に詩才を認められ、また、草野心平が経営していた焼き鳥屋を訪ねて知己となり、最後には草野家に間借りして、家族の一員のように暮らした。この友情は、後に『歴程』のメンバーとなる、宍戸儀一や逸見猶吉などとの出会いも生んだ。

現実生活の苦しさはあったが、「檻襤(はろ)の歴史」「亜寒帯小景」などの代表作が生み出された多産の時期でもあった。詩人善助は、ここから大きく飛躍しようとしていたのである。

昭和七年六月二十七日、善助は詩人仲間たちと三人で大森のバーで飲んで、一人帰る途中で線路から墜落し、死んだ。友人達が十日後にその死をやっと確認したときは、すでに身元不明死体として荼毘に付された後であったと伝えられる。

生前一冊の詩集も刊行できぬままに、不遇の死を迎えた善助の没後、友人達によって遺稿集が次々と刊行された。詩集『亜寒帯』は心平、宍戸、郡山ら生前の善助を支えた詩友たちがその編集を手がけた。



痛ましい純情の詩人

高村光太郎はその序で「この痛ましい純情の詩人がどういふ位置を我が詩の歴史の上に持つか、其はもう少し歴史そのものが進展してから考へねばなるまい。」と記している。

しかし、善助に関する資料は散逸が激しく、その初出雑誌も解明されていないものが多いなど、まだ研究が尽くされているとは言い難い状況である。その意味でもこれらのノートは、詩人石川善助とその作品の軌跡を知る上で、貴重な新資料であるといえよう。

ノート「無言貿易　No.13」

○ノートの概要

善助は、一九二一(大正十)年頃から創作のためにノートを持ち歩き、それらは全部で十四冊あったと伝えられる。当館が現在所蔵しているノートはそのうちの四冊である。ノートはすべて表紙にタイトルがつけられ、また各ページのほとんどに、執筆日が書き込まれていた。

①ノート「寂しき精舎　No.1」

裏表紙には数点のカットと、「Zensuky Traidmerk /1923・1926」の記述がある。執筆日は一九二一(大正十)年十一月十一日から一九二六(大正十五)年四月三日。裏表紙の「1923」の記述と齟齬があるが、既に書きためていたものをこのノートに筆写したのか、何らかのずれが生じたのかは現段階ではまだ判断できない。このノートには主として童謡や童話などが書かれている。

ノート「亜寒帯　No.14」

②ノート「散文　1923 われは苦るしき詩作に命をかけたり」

執筆時期は一九二三(大正十二)年十月一日に始まり、死の前年の一九三一(昭和六)年十一月四日まで。小説のあらすじや、創作メモ、随筆、日記など、おもに散文が書き付けられている。また、随所に貼付されている新聞の切り抜きは、創作の材料にしたものと思われる。

③ノート「無言貿易　No.13」1929.Oct. 1ST. / ZENCKY

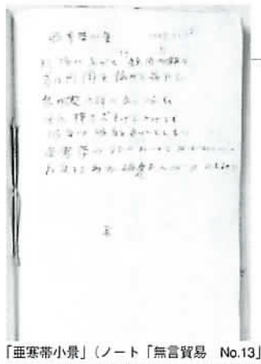
執筆時期は一九二九(昭和四)年十月一日から一九三〇(昭和五)年五月二日。

④ノート「亜寒帯　No.14」1930.6

執筆日は一九三〇(昭和五)年六月二十六日から一九三二(昭和七)年六月八日。善助はこの年の六月二十七日に死亡しているので、死の間際までの執筆ノートと推測される。

No.13とNo.14のノートは、比較的詩集の形のまとまりを示している。No.13のノートには、当時の詩誌に発表された善助の代表作「檻襤の歴史」「亜寒帯小景」「海の娼婦」などの初期形が書きしるされている。特に「檻襤の歴史(ノートでは「ぼろの歴史」)」は、発表されたものとはほとんど別作品と思われるほど異同が大きく、作品の成立過程を知る上で興味深い。

一方No.14のノートは詩作品のほかに、雑誌への寄稿の記録、散文の断片などが書かれ、推敲や削除の後も激しい。生前刊行を計画していた詩集の送付先には、鈴木ヘキ、天江富弥等のほか、「宮澤ケンジ(賢治)」「一穂(吉田一穂)」などの名前もあり、善助の詩壇での交友地図を読み取ることができる。


「亜寒帯小景」(ノート「無言貿易　No.13」)

われひとりのこころをとむらいみまもる

これらのノートにある、数十篇の詩の中には、「北太平洋詩編」に通じる、「波だちうごきたえぬところ／羅針盤の中にNを指し死ぬるもの。／磁石の憂鬱。／北。(「北」1929.10.1)」や「肉親と会ひたいと思ふことは／だれの目玉をみてもありありわかる／朝焼にきょろきょろもえてゐるもの／そいつをおしのやうに噛みしめて／後に後の海をにらめ／俺は俺の仕事をしなければならないのだ(「肉親」1929.10.13)」など未発表(もしくは初出雑誌が不明)と推測されるものも多数ある。また、詩のみならず絵にもその才を見せた善助のイラストやカットが随所に描かれている。これらの貴重な資料から、さらに詩人石川善助についての考察を深めていくことができるだろう。

No.1のノート末尾の「1926.4.3おぼいがき」の一節には次のようにある。

「私のための詩篇にして、あまりにも異情の感覚なれば読者よ、おなしき侘しさにひたるには　かそけきことなるべくも　わが青春の碑銘なればわれひとりのこころをとむらいみまもるなり」

ただひとりの詩人としてあることに生涯を賭けた、善助の姿である。(赤間亜生)

文学のある風景　第1回

ブック・カフェ火星の庭

前野さんご夫婦がそれまでの仕事に一区切り付け、二人で半年間ヨーロッパを旅したときに見つけたのが、“ブック・カフェ”というスタイルだった。

「カフェと古本屋を一緒にした店が、ちょっとした町なら大抵あったんです。落ち着いた雰囲気の店が多く、“本を読みながら、お茶をする”って、とても良い習慣だなあと、あらためて感じました」と健一さん。帰国後、二人で何か店を始めたいと考えたときも、このブック・カフェを真っ先に思い浮かべた。

もともと本好きの二人。特に久美子さんは太宰治の大ファンで、かつて旅館として営業していた頃の太宰の生家「斜陽館」に住み込みで働いたこともあるほど。蔵書を出発点とする店の棚は、文学はじめアート系の本が大半を占める。一般の古書店とは一味違う品揃えを目当てに、固定客も徐々に増えてきた。「眠っている蔵書があったら、目を覚ましてあげてください。喜んで買い取りますから」

コーヒーもポットサービスの紅茶も、名著を集めるようにこだわっているのかもしれない。「八百屋さんは野菜を売り、魚屋さんは魚を売って生きている。そんなふうに普通に街の中で店を続けて、二人で生きていけるだけ稼げれば」と、健一さんは厨房に戻った。

book cafe 火星の庭
〒980-0014 仙台市青葉区本町1－14－30
電話／022－716－5335
http://www.ne.jp/asahi/martian/garden/
e-mail／kasei@cafe.email.ne.jp
11:00～20:00(日・祝～19:00) OPEN 水曜定休

「火星の庭」とは、二人で考えた物語に出てくるユートピア。ちなみにこれがスタッフでもある画家の工藤夏海さんが描いた想像図です。詳しくは来店して直接質問してみてください。

探し続けていた本に出会えそうな本棚、向かい側の壁はギャラリー。月に1回はライブも。